

大阪の街を考える — 「いちびり」と笑い—

福島 義和

はじめに

大阪の都市整備が中央政府の支持無しで実施されてきたことは、よく知られたことである。港湾や道路の整備、市電など公共交通機関の整備などである(鳴海・橋爪, 2007)。その事例の一つが掘割の発達した「水都大坂」で約 200 の橋のうち、幕府の公儀橋が 12 か所に過ぎず、残りは町人たちが出資した町橋であった事実(角野, 2007)。それらの底流には、大阪人のもつ「合理性」や「革新性」が見え隠れする。東京で関東大震災のあった 1923 (大正 12) 年には、大阪市長になった關一が実施した地下鉄御堂筋線やキタ・ミナミの都市の二極構造の構築、さらには都心と郊外のネットワーク化など、思い切った政策が採用されている。あの南北を貫く美しい御堂筋の道路が、いろいろなパレードの舞台になっていることは大阪市民の誰もが知るところである。

1章「いちびり(逸ぶる、市ぶる)」と笑い



写真1 太左衛門橋からみたヘップファイブ



写真2 道頓堀橋からみたヘップファイブ

まず、写真1・2をご覧ください。ファッションビルの途中から顔を出す観覧車（正式名はヘップファイブ、1998年に竹中工務店が建設）は、おそらく東京では見かけないだろう。優等生の建築の多い東京には、笑える建築はない。「面白かったらええやんか」精神が、街を面白くし、ミナミの街を創造している。この「いちびり」の行為が一種のトリックスターの感覚を助長し、次々と大阪の街に仕掛けを設置する。当然、「いちびり建築」の建設には建築規制が厳格であればあるほど、街が画一的になり、「笑い」がなくなり、地域性も欠落する。

今、どこかの政党のポスターが、「脱中央集権化」と声高に叫んでいるが、ではどのような街を創造していくのか？東京への対抗意識だけでは、街は創造できない。その際一つの考えが、楽しく、笑える建築の建設である。まず、建築を眺める観客を大切にしなければならない。つまり、街の市民が楽しめる空間を創造していくことが重要である。

2章 大阪都構想は本当に無意味なのか？

橋下氏の「大阪都構想」はポピュリズムに翻弄されたハシズムで、「大阪の民主主義」を崩壊するディメリットの多い政策であるといった批判が多い。最初に大阪都構想の基本枠を示した図1を見てください。

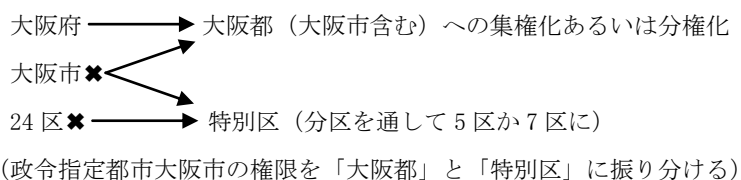


図1 大阪都構想と二層制（福島解釈）

大阪市をなくして「二重行政」を是正し、効率的な行政を行う。当然このような「効率性」だけが前面に出ると、従来の大阪市の重要な役割である都市計画や教育の権限はどうなるのか？「大阪都」への集権化の弊害が生まれないか？確かに現在の大阪市や堺市の都市計画を、新しい「大阪都」で十分に担当できるのか、の課題はあるが、現在24区の行政区を合区していくつかの特別区に再分類し^(注1)、各特別区の風通しをよくして、身近な特別区に市民の多様な意見や要望をくみ上げる制度は効率的だし、二重行政の無駄もある程度解消できる。ただ橋下氏も二重行政の克服ばかりを主張するのではなく、特別区による市民レベルのサービス向上の可能性を具体的に主張すべきではなかったか？東京を意識するあまり、制度の変革（もちろん重要である）に力が入りすぎ、肝心な大阪市民へのサービス向上が強く語られなかったと、少

なくとも筆者（当時東京在住）には感じられた。

小括として、「阪神・淡路の震災でも証明されたが、地域社会のもつ力、大阪でいえば「いちびり」と「笑い」がどんどん許容される、柔軟な社会の構築を政治家も再認識してほしい」。ハードは大胆に、ソフトはきめ細やかに。

（注1）区割り試案で考慮された項目は以下の4点。

- ①人口規模（30万人と45万人）
- ②都市機能の集積性（集積性と多核化）
- ③地域性（地域間の結びつき、過去の分区・合区）
- ④移動手段（鉄道網など）

特に、北区と中央区を合区にするか、分区にするかが重要な区割りになる。具体的な区割りは地形（埋立地など）や歴史、防災なども考慮する必要がある。

3章 大阪から何を学べるか—いちびり精神とレジリエンス—

中央集権型社会が強まると、市民が見えなくなる怖さがある。被災の現場になかなか救助に向かえない。最近の被災地の報道で時々中央の指示を待たずに被災地に迅速に向かう場面に遭遇する。ある意味では時間との闘いである。上からの情報を待っている暇はない。その一方で、被災地の地域社会がもつ成熟度や脆弱性が問題になってくる。つまり、日頃の付き合いが欠如し、避難訓練やハザードマップへの認識が弱い社会では、回復力（レジリエンス）も脆弱である。このように考えると、大阪の下町に残る祭り（住吉さんや生根さんの祭り）を支える文化が大きくクローズアップされてくるし、中央に依存しない「いちびりの建築」を多数、建設し続けるエネルギーは、笑いに紛れながらも場所の持つ、計り知れない魅力を生み出している。「公助」よりもまず「自助」や「互助」が立派に育つ社会が、まだまだ大阪の下町を歩くと残っている。この下町のもつローカルな、脱中央集権的な、しなやかな社会が、まさにレジリエンスの高い社会にならないだろうか。あのナンバの観覧車もしなやかな社会であればこそ、「いちびり精神」で建設されたものなのかもしれない。

今後の詳細な検証が必要であるが、「レジリエンスの三角形」の縮小化（図2参照、文献1）、つまり自然災害などの危機発生に対して、いかに「時間の短縮化（横軸）」と「地域社会の機能の増強（縦軸）」を図るかが大きな課題になる。繰り返しになるが、大阪のもつしなやかな街づくりに学ぶところは多いはずである。蛇足であるが、ちょうど今、イギリスがEUから離脱することが国民投票で明らかになったようだが、移民問題を抱える多文化共生の難しさを痛感している。社会が分断・解体に向かう中、「いちびり」と「笑い」の精神が街づくりには大切である（注2）。

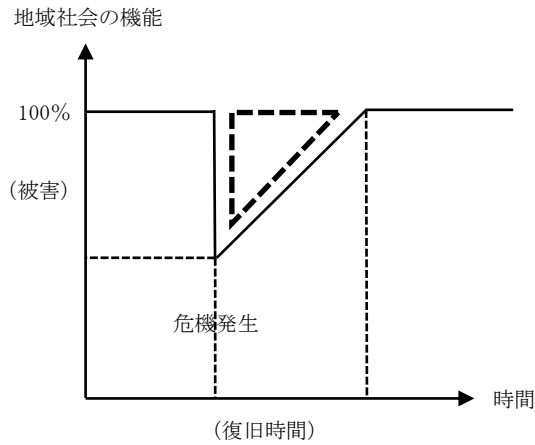


図2 レジリエンスの三角形の縮小化 (文献1 p51 の図表 2-1 を基に作成)

(注2) 関西大学は、「なにわ大阪研究センター」を開所(2016. 4.3)し、住吉大社などの名所研究、古地図などを利用した防災研究、そして上方演芸に代表される大阪の「笑い」に着目した研究を開始した。

(参考文献)

1. 「レジリエンス社会」をつくる研究会(2016)『しなやかな社会の挑戦—CBRNE、サイバー攻撃、自然災害にたちむかう—』日経BPコンサルティング
2. 藤井聡・村上弘・森裕之(2015)『大都市自治を問う—大阪・橋下市政の検証—』学芸出版社
3. 鈴木亘(2013)『脱・貧困のまちづくり「西成特区構想」の挑戦』明石書店
4. 砂原庸介(2012)『大阪—大都市は国家を超えるか—』中公新書
5. 長田直之(1999)「大阪の「いちびり」建築」(「ギャラリー間『建築マップ大阪・神戸 TOTO 出版、pp66-67)』
6. (社)大阪自治体問題研究所編(2009)『道州制と地方自治を問う』自治体研究所
7. 大阪市立大学 都市研究プラザ(2007)『フォーラム 大阪の空間システムを考える』